（別添２）

# 肥料コスト低減対策を推進する際のポイント

## 【はじめに】

農業者の肥料コスト低減に向けた取組が促進されるよう、各地域において、農業者が実際に取り入れやすい取組をできる限り具体的にお示しいただくことが重要です。また、肥料の無駄を減らし、地域の未利用資源を活用することは、環境負荷の低減につながり、農業の持続性の向上を目指す「みどりの食料システム戦略」にも沿った取組となります。この観点からも、施肥体系の見直しに取り組む意義があります。

指導に当たっては、これまで各地域で蓄積されたマニュアルや実践例などの知恵を活用すること、土づくり専門家等をはじめとした施肥に関する指導を適切に行える方を活かして農業者が安心して施肥体系の見直しができるよう配慮することも重要です。また、例えば、都道府県段階で関係機関が構成員となる協議会等の体制を整備し、あらかじめ関係者間の連携のあり方や役割分担を明確にすること、指導に必要な情報の一元化を図ること等についても御検討願います。

以下に、推進事項の例を整理いたしましたので、御活用下さい。

## １　土壌診断等に基づく施肥設計の見直し

### （普及啓発）

□　土壌に肥料成分が十分に存在する場合などには、生産に影響が少ない範囲で肥料の投入量を減らすこと、リン酸やカリなど特定の肥料成分が低い肥料を利用することは肥料コスト低減の取組では特に重要となる。生産への影響が少ないと判断される場合や土壌診断によって肥料成分の残存が確認された場合は施肥設計の見直しを検討することについて、農業者への普及啓発を強化する。

### （条件整備/情報提供）

□　肥料の販売事業者とも連携しつつ、単肥や汎用肥料など比較的安価な肥料や、土壌診断結果に基づく低成分肥料銘柄等の利用の拡大等を推進する。

□　効率的に土壌診断が実施できる体制を構築するとともに、土壌分析機関の情報を農業者にわかりやすく提示する。また、農業者自身で実施できる簡易土壌診断についても、その実施方法などについて情報提供を行う。

□　土壌診断に基づく施肥指導は、処方箋の作成を支援するなど、より具体的でわかりやすいものとする。

### （実証展示）

□　土壌の肥料成分に応じて施肥量を減らした場合であっても収量や品質等に影響が少ないことを理解していただくため、実証展示ほの設置を推進する。また、その実証結果を様々な機会を捉えて積極的に情報発信する。

## ２　可変施肥など新たな技術導入の加速化

（普及啓発/情報提供）

□　肥料コスト低減に向けた取組として、うね立て同時施肥などの局所施肥技術、センシング技術等と連動した可変施肥技術、営農管理システムを利用した適正な施肥管理技術など、地域において作物等ごとに利用できる技術をわかりやすく提示し、その導入を検討するよう、農業者への普及啓発を強化する。また、必要に応じて、各技術について相談窓口を設置する。

（実証展示）

□　新技術の導入による肥料コスト低減効果を理解していただくため、実証展示ほの設置を推進する。また、その実証結果を様々な機会を捉えて積極的に情報発信する。

## ３　堆肥など地域の未利用資源等の活用

（普及啓発）

□　肥料コスト低減に資する取組として、堆肥など未利用資源の活用や緑肥作物の利用を検討するよう、農業者への普及啓発を強化する。特に、発酵鶏糞などの比較的安価でリン酸やカリの化学肥料代替として期待できる資材の利用推進を図る。

（条件整備/情報提供）

□　堆肥などの活用可能な地域の未利用資源に関する情報（価格、品質、散布・運搬などの条件）を収集し、農業者にわかりやすく提示するほか、畜産農家、肥料関係業者、耕種農家のマッチングを進める。

□　堆肥については、施用に労力を要する、品質や肥効が均一でないなどの課題もあることから、散布体制の整備、堆肥のペレット化や堆肥の生産方法に関する研修などを推進する。

（実証展示）

□　堆肥など地域の未利用資源を活用した場合であっても、収量や品質等への影響がない、または改善効果があることを理解していただくため、実証展示ほの設置を推進する。また、その実証結果を様々な機会を捉えて積極的に情報発信する。

（以上）